Netherlands1945 **勝利に向けて**

通信参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Netherlands 1945 勝利に向けて

【Nコード】

N3262P

【作者名】

通信参謀

【あらすじ】

一九四五年三月、人類とネウロイの長い戦いは、最終局面に入ろうとしていた。

各地で勝利を重ねる人類に対し、ネウロイは衰退を繰り返していた。そんなある日、欧州に派遣されている扶桑皇国陸軍第12飛行師団に所属する飛行第4戦隊に、新型ストライカーが届いた。

前編 新型ストライカー

一九四五年三月、もはやネウロイは人類の脅威たりえなかった。ガリアで、ヴェネツィアで、スオムスで、オラーシャで、人類は勝利を重ね、ネウロイは確実に衰退していた。

ネウロイは四四年一二月にガリアで、四五年一月からはオストマルクで相次いで攻勢に転じたが、連合軍の反撃の前に頓挫し、あとは敗走を繰り返すだけだった。

人類はカールスラント、オストマルクの完全解放を目指し、進撃を続けていた。

三月一六日、扶桑皇国のとある家に、扶桑皇国陸軍の消印を捺された一通の手紙が届けられた。機械化航空歩兵として欧州で戦っているこの家の娘の、野辺^{ノノ} 重美^{しげみ}曹長からの手紙だ。

『拝啓 扶桑では間もなく、桜花の咲き誇る頃でしょうか。こちらも日ごとに暖かくなり、春の訪れを実感しています。』

先日頂いたお手紙では、扶桑本国におきましてはネウロイの侵攻もなく、日々平和にお過ごしとのこと、安心致しました。

さて以前に申し上げた通り、私は第××飛行師団の××××××部隊に配属されています。現在は欧州の××××××で防空に携わっておりますが、間もなく新型の戦闘機の××××××が、私の所属する飛行戦隊に配備されると専らの噂で、部隊の戦友共々楽しみにしております。

追伸 師団長閣下のお話では、すでに連合軍の勝利も近いとのこと。来年こそはお正月を家族で揃って過ごせることを、祈っております。』

手紙が実家に届くころ、重美の所属する扶桑皇国陸軍第12飛行師団第4戦隊、通称天風三五〇一部隊は、アルンヘム郊外の仮設飛行場にあつた。

飛行場といつても、地ならししてバラックを建てただけだ。格納庫も雨風を凌げる程度の粗末な物で、いかにも急造といった具合だ。リベリオン第9機甲師団がライン川を渡河してから、まだ九日しか経っておらず、アルンヘムも戦火の余燼が燻っているのだ。

ましてやこれからのさらなる攻勢でこの仮設飛行場は、きつとすぐに使われなくなる。この程度で十分なのだ。

「曹長殿、曹長殿」

早朝、重美に高木^{たかぎ} 伝枝^{のじえ}伍長が声をかけた。

重美はその時、夜間哨戒を終え、食堂で朝食を採りながらラジオに耳を傾けていた。ちょうどニュースが終わり、ノイエカールスラントの、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏するクラシックが、流れ始めていた。まるで生放送のような音質なのに、実は録音だというから驚きだ。

同じ小隊でロツテを組む伝枝は、一足先に部屋に戻っていたはず。「どうしたの?」

「戦隊長がすぐに格納庫に集まるようにと」

「格納庫……、ってひよつとして!」

「ハイッ! とうとう届いたんですよ! 新型脚が!」
二人は格納庫に向け、まっしぐらに走りだした。

戦隊では、以前から使っている二式戦闘脚屠龍に代わり、キ102が新たに配備されるという噂が、前々からあつた。屠龍は地上襲撃脚や邀撃脚の他、夜間戦闘脚などとしても使われ、汎用性は高い。しかし、いかんせん古い。性能の陳腐化が著しかった。

みんな、新型脚の配備を心待ちにしていたのだ。

格納庫の前に4戦隊のウィッチが集まり、整列した。

戦隊長の町田^{まちだ} 久子^{ひさこ}少佐が、格納庫の中から姿を見せる。

「みんな揃ったようね、中に入って」

町田少佐に導かれるまま、ウィッチたちは心を躍らせながら、中に入っていた。

そこには六機の戦闘脚が並んでいた。

キ102じゃない。全員が一瞬で気づいた。識別のために様々なストライカーの姿形を、頭にたたき込んでいるから、間違いはない。これまで、見たこともないストライカーだ。

「これは……？」

「キ109よ」

町田少佐が、戸惑うウィッチたちに言った。

キ109？ 誰も聞いたことがない。正式名称や愛称がないことから、恐らく試作機なのだろう。

思い思いに六機の周りに集まり、検分し始めた。

一見して、普通のストライカーじゃない。普通のストライカーは足を差し込む穴が片足に一つずつだが、このキ109には二つずつある。穴が二つも空いた靴なんて、普通じゃない。

そして穴が多い分、直径も大きい。

「発動機も、だいぶ大きいようですか？」

重美の問いに、町田少佐は答える。

「マ42、離昇出力一九〇〇馬力、公称出力は一速全開で一八一〇馬力よ」

「すごい」

屠龍のマ25が離昇出力一〇五〇馬力だから一・八倍だ。速度も相当早そうだ。

「固定武装はどんなのを使うんですか？」

伝枝の問い。

「これよ」

キ109の横に置いてあった。大きな木箱が六個、積んである。整備兵に頼んで、中から一門出してもらおう。

それを見て、全員が目を見張る。

「なんですか、この大きな大砲は!？」

「デイオミディア改を確実に撃墜するために、八八式七糶半野戦高射砲をもとに開発した、ホ501よ」

「七糶半つて……」

それを聞き、ウィッチ全員が絶句した。

75ミリ砲と言えば、扶桑陸軍の新鋭陸戦ストライカーの三式歩行脚や四式歩行脚、あるいは本国で開発が進んでいる五式歩行脚の装備と同じ口径だ。そんな大砲を空中で使うなんて、正気の沙汰じゃない。屠龍は37ミリ砲や40ミリ砲だし、キ102乙だって使うのは57ミリ砲だ。

「デイオミディア改は決して無敵の存在じゃない。しかし今の装備では全てを撃墜することはできないし、撃墜するためには、敵の弾幕の中に飛び込まなくちゃいけない。でもこのホ501なら、相手の射程外から一方的に大きな打撃を与えられるわ。

ベルリンに向けて進撃する地上部隊をネウロイから確実に守るには、これが必要なのだ」

「しかし戦隊長」

木村 光希少尉が、質問する。

「なんですか?」

「見たところ、キ109は六機しかありませんが、どの飛行隊が使用するのですか?」

飛行隊の定数は三個小隊一二機だが、キ109はその半分しかない。つまり、どの飛行隊に配備されても、半分はこれまでどおり屠龍を使うことになる。

「いい質問ね。これを見て」

町田少佐は二つずつ空いた穴を指差した。

「このストライカーは複座式なの」

「複座式……？」

複座式と聞いて光希は以前見たことのある、カールスラントのHe 111 ツヴァイリングを思い浮かべた。あれはかなりの変わり種で、二機のストライカーを横にくっつけたような姿だった。

キ109は横ではなく、縦に並べてある。たぶん、ウィッチも縦に並ぶのだろう。

「ホ501は重いし、次弾の装填も手動だから、一人では大変でしょう。それで複座になったの」

当面は夜間警急中隊で使用します。とりあえず、今までのロツテのペアで一機ずつ使って。それに伴い警急中隊は各小隊を三機に編成し直し、二機一組のロツテから、三機一組のケツテを基本にするわ」

夜間警急中隊といえば、重美と伝枝がいる飛行隊だ。新型ストライカーを使えることを喜びつつも、二人は不安を感じていた。

前編 新型ストライカー（後書き）

ストライクウィッチーズ二次創作の第三弾です。
前に書いた二作はいきなり二〇一五年に飛びましたが、今回は一九
四五年のネーデルランドが舞台です。

作中に出てきたウィッチのモデルは、

町田久子少佐 町田久雄少佐

木村光希少尉 木村定光中尉

野辺重美曹長 野辺重夫軍曹

高木伝枝伍長 高木伝蔵兵長

となっております。

最初は他と同じく短編にしようかと思ったのですが、長いと（私が）
読みづらいたので、前編と後編に分けました。
後編は明日投稿の予定です。

それではご意見ご感想をお待ちしています。

後編 勝利に向けて（前書き）

お待たせしました。

後編です。

後編 勝利に向けて

不安は思い過ぎだったようで、重美は四日で早くもキ109に慣れてきた。夜間警急隊第2小隊に属する重美と伝枝は、今日も夜間哨戒に飛び立とうとしていた。

四四年の夏以降、ネウロイの襲撃は不規則になっており、夜間哨戒は以前にも増して重要になっている。

滑走路脇のエプロン（と言っても単に地ならしただけのスペース）で重美が75ミリ砲ホ501を抱え、その背中に7.7ミリ機銃を背負った伝枝が負われている。周囲からは二人羽織などと揶揄される状態だ。

準備を終え、哨戒に出ようとした時だった。

『北部地区警戒警報発令！』

突如、けたたましい警報が鳴り響いた。

『敵大型ネウロイ三〇！ 現在ミュンスター上空を高度六〇〇〇にて西進中！』

「曹長殿！」

「うん、いきましよう！」

すでに準備が終わっている二人は先に出撃し、残りの仲間の追及を待つ。

『ニワウメよりサカキ、ニワウメよりサカキ』

二人が飛び立ったところで、指揮所からの情報。

『敵はおそらくデイオミディア改、アルンヘムへ向け時速四〇〇キロにて侵攻中、目標は第9機甲師団司令部と思われる』

「ミュンスターからアルンヘムまでは一〇〇キロほどしかない。五分で到達する計算だ。」

「伝枝、急ぐわ、気合い入れて！」

「はいッ！」

二人は呼吸を合わせ、魔導過給機を一気に吹かした。

高度五五〇〇、暗闇の中でストライカーのエンジン音だけが響く。探照燈が、空を切り裂く。

重美は抱えたホ501を確認した。砲弾装填、完了。安全装置、解除。

「さて、敵は……」

「曹長殿、あそこに！」

背中では肩にしがみつく伝枝が、探照燈に照らされた辺りを指差した。

ネウロイの黒い影が、ほんの一瞬だが探照燈に映し出された。デイオミディア改だ。戦争初期に出現した重爆型ネウロイに、ビームを装備したもので、色も銀色ではなく黒くなっている。

「見つけた！ サカキよりニワウメ、ワール川上空、敵発見！ これより交戦す！」

ワール川を越えられれば、アルンヘムはすぐそこだ。一気に上昇する。デイオミディア改がどんどん大きくなる。

ホ501の九五式破甲榴弾は、射距離一〇〇〇メートルで六五ミリの装甲を撃ち抜けるから、当たればまさに一撃必殺だ。

問題は、弾が一五発しかないことだ。砲弾重量は六・二キロもあるし、そもそも75ミリ砲弾はかさばる。ウィッチ二人でも、一五発が限界だ。

一発必中を心掛けるために、なるべく近づかなくてはいけない。

照準環の中で、デイオミディア改が迫る。

距離五〇〇。

「テッ！」

ドン！ という砲声と共に、37ミリ砲とは比べ物にならない反動。75ミリ砲弾が飛び出した。

そのまま高速でデイオミディア改の横をすり抜ける。

パツとデイオミディア改が赤く光った。

重美は咄嗟に機体を傾けた。つい先程までいた場所を、真っ赤なビームが突き抜けた。

「どう!？」

「ダメです! 外れたみたいです!」

「もう一度いくわ! 覚悟して!!」

「は、はいッ!」

重美は排莖すると、

「次弾をちょうだい」

「はい」

伝枝が渡した75ミリ砲弾を器用に受け取り、砲尾に挿入する。

今度は上空から時速五五〇キロで緩降下していく。相対速度は時速一五〇キロだ。今度はしっかりと狙いをつけられる。

「テッ!」

ドン! 秒速七二〇キロで飛び出した砲弾は、一直線にディオミア改の胴体につつまみ、コアを射貫いた。

ネウロイは白い破片を撒き散らし、崩壊する。

「曹長殿! 命中! 命中です!!」

降り注ぐ破片は、ワール川の水面に無数の三角波を立てる。

「こちらサカキ、敵一機撃墜!」

降り注ぐ破片を避けながら重美が報告した時、上方で炸裂音がした。再び破片が降り注ぐ。

「こちらツバキ、敵一機撃墜!」

「木村少尉殿ですよ!」

ツバキは光希の呼出符牒である。以前、屠龍で一日に三機のディオミア改を撃墜したことは、扶桑本国でも話題となり、陸軍大臣から軍刀を拝領した飛行第4戦隊のエースだ。

「私達もいくよ!」

重美は叫ぶと、伝枝の返事を聞く前にディオミア改に向け、突進した。

夜明け前、ウィッチたちがちらほらと仮設飛行場に帰還してきた。三月二〇日深夜、ディオミディア改による襲撃に対し、扶桑皇国陸軍第12飛行師団は、飛行第4戦隊を迎撃に上げた。

ディオミディア改三〇機に対し、飛行第4戦隊は屠龍一二機とキ109六機の合計一八機で邀撃した。

戦果は赫々たるもので、ディオミディア改一六機を撃墜し、未基幹なしだった。

市街地の一部が攻撃を受けたものの、最近までネウロイの支配下にあったことから住民はおらず、人的な被害は皆無だった。

「うーん、疲れたあ〜」

夜明け前によくやく帰還した重美は、ストライカーを外し、思いきり伸びをした。足を覆っていた圧迫感がなくなり、開放感に満たされる。こうして無事に帰ってきて、ストライカーを外した時の開放感をじっくり味わうのが、ささやかな幸せの一つだ。

しかしその横では、伝枝がへたり込んでいた。

「どうしたの？」

「怖かったあ……」

それを聞いて、重美はつい笑ってしまった。これまで何度も砲火をかき潜ってきたというのに、今になって突然「怖かったあ〜」って。

「はははは、何よいまさら怖かったなんて」

「だって、後席は曹長殿に操縦を任せるしかないんですよ！自分で操縦できずにビームの中に突っ込むなんて、怖いじゃないですかあ〜」

半ば涙目で訴える。上目使いで。童顔の伝枝がそんな仕草をするのと、非常に愛らしい。

（か、可愛い。もしバルクホルン大尉殿が噂通りのお方なら、一発

で撃墜ね)

バルクホルン大尉限定で、ホ501より威力がありそうだ。重美は矢礼にもそんな考えを抱いたが、すぐに振り払う。

「はいはい、それより煤で真っ黒よ、寝る前にお風呂で体を洗いましょうか」

お風呂と言っても、急造の仮設基地なだけあって、ドラム缶を使った五右衛門風呂だ。一応、ドラム缶の周りや脱衣所は木製の壁で隠されている。

巫女装束にしか見えない飛行服を脱ぎ捨て、二人で体を洗い、ドラム缶の湯船に入る。頭にはもちろん濡らした手拭いを乗せて。しばらくして、脱衣所から声が聞こえてきた。服を脱ぐ音も。湯煙の中から姿を現したのは、町田少佐と光希の二人だった。

「戦隊長、少尉殿」

二人はあわてて立ち上がり、不動の姿勢をとった。

「楽にしていいわ。お風呂ではのんびりしましょう」

「なんだ、一番風呂を取られてしまったか。私達で朝風呂に入ろうと準備を頼んでおいたのだが」

道理でお湯が張ってあったわけだ。光希の言葉を聞いて、重美と伝枝は、なぜ自分たちがきた時すでに入浴の準備が整っていたことに、納得した。

「申し訳ありません！」

「いや別に、先に入っても構わないけど」

言いながら町田少佐と光希も体を洗い、並んでいるドラム缶に入った。頭に手拭いを乗せることを忘れない。

町田少佐が二人を労う。

「昨夜はご苦労様」

「いえ、航空歩兵として当然のことです」

「そう鯨張らないで。それより、あなた昨夜の戦果で五機撃墜でし

よ？」

「え？ あっ、そういえば」

町田少佐な言われて重美は思い出した。ここしばらくは、大型ネウロイの出てくるような大規模な戦闘がなく、撃墜数は長らく四で止まっていたのだ。

「おめでとう。これであなともエースの仲間入りよ」

「重美、おめでとう」

「おめでとございます、曹長殿」

町田少佐に続き、光希と伝枝が祝ってくれる。

「ありがとうございます。これからも頑張りますので、よろしくお願います」

「いやあ、時が経つのは早いな！。あの無茶な初撃墜から半年も経っていないのに、重美ももうエースか」

「あ、あれは、できれば忘れてください……」

あまり思い出したくない過去に、重美は赤面した。彼女の初撃墜は、操作の失敗から自らネウロイに体当たりしてしまったとう、事故によるものなのだ。しかもネウロイを砕いたあと、服が……。あんな失敗はむしろ闇に葬り去りたい。

「あの元501のイエーガー大尉殿だって、体当たりで一機撃墜しているんだ、恥ずかしがることはないさ」

光希は言うが、あれだって半ば事故だったのだから、あまりフォロイになっっていなかった。

翌二二日、夜明け前から飛行第4戦隊は格納庫前に並んでいた。

今日は進攻作戦があるのだ。

町田少佐は居並ぶ部下の前に立ち、訓示を始めた。

「昨日も説明した通り、本日より第3軍がライン川を渡河し、カールスラント本国へ進攻します。カールスラント各地に存在する巢は、ネウロイにとって最後の牙城であり、激しい抵抗が予想され

ます。私達も上空の援護に回るけど、よろしく頼みます」

町田少佐の訓示が終わると、一斉に動き出す。発進ユニットに駆け上がり、愛機に足を接続する。

ロックを外し、屠龍はロツテごと、キ109はケツテごとに滑走路に進出し、離陸していく。

二四機の屠龍と、六機のキ109、合計三〇機が、アルンヘムの郊外に編隊を組む。

重美と伝枝は光希の横に並んだ。

「それじゃ、いくよ」

「はい！」

キ109は勝利に向け、飛び立っていった。

後編 勝利に向けて（後書き）

「Netherlands 1945 勝利へ向けて」後編でした。もともと短編として企画していた物を、私がダラダラ長いのは好きじゃないということ、独断で前後編に分けたわけですが、どうでしょう？

ちなみに描写のなかで私から一つ、自分で書いておいて難ですが、「四人の少女が並んでドラム缶に入ってる風景が想像できません！」作中に出てきたバルクホルン大尉に関する噂は、説明するまでもないと思います（噂の発生源もたぶん）。

それではご意見ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3262p/>

Netherlands1945 勝利に向けて

2010年12月6日15時40分発行